

「情報リテラシー学習」における
「ディベート」の指導
—主・副担当交代制
チーム・ティーチングによる実践—

研究部 肥沼 則明, 中村 昌子

筑波大学附属中学校「研究紀要」第54号抜刷

「情報リテラシー学習」における「ディベート」の指導

—主・副担当交代制チーム・ティーチングによる実践—

研究部 肥沼 則明

中村 昌子

1. はじめに

近年、学校教育においてディベート（授業で行うものは「教室ディベート」と呼ばれることが多い）の指導が盛んに行われるようになってきた。これは、とかく日本人は自分の意見を言うことが不得意であるという批判に応えるための流れの1つと考えられる。ただし、それは教科指導の一部として行われるのが一般的である。例えば、国語科や英語科では言語学習を進めるための一手段として、社会科では題材理解を深めるための一手段として指導されている。これは本校においても同様であり、これまでは教科の枠を越えた形で指導されるということはカリキュラムに位置づけられていなかった。しかし、平成12年度に「総合」の授業が1年生にも試行的に取り入れられてから、本校ではディベートの指導が他の4つの学習とともに「情報リテラシー学習」の1つとして行われるようになった。

一方、本校にはディベートそのものを専門に指導してきた教員はいなかったため、どのような内容で授業を行うのかということは授業担当者に委ねられることになった。初年度である昨年は、英語科の蒔田守教諭が自身の教科におけるディベート指導のノウハウを元に独自の視点で指導を行った。授業の内容は生徒からも大変好評で、氏の指導技術の高さもあって、毎回活気のある授業が展開された。そこで、本年度は基本的には蒔田氏の指導内容を継承しつつ、そこに本年度の担当者である肥沼（英語科）と中村（音楽科）の2人が新たな指導観に基づいた内容を加え、さらに複数の教師が指導するメリットを探りながら授業を行うことになった。

2. 『ディベート』学習の位置づけ

(1) 1年生「総合」の「情報リテラシー学習」

① 学習内容

本校におけるディベートの指導について語るには、まずその上位に位置する1年生「総合」の「情報リテラシー学習」の位置づけについて説明する必要があるであろう。「平成13年度研究協議会発表要項」によれば、本校の「情報リテラシー学習」において育てたい生徒像は次のとおりである。

ア 必要な情報を受信し、適切に整理することができる。

イ 受信した情報の価値を判断し、必要に応じて選択して活用することができる。

ウ 理解を深めるために情報を仲間と伝え合うことができる。

これらを授業の形にするにあたっては、社会の情勢や生徒の実態から指導する価値のある学習内容を見出すことが重要である。本校では、アからは情報収集源となる媒体およびそれらをさらに効果的に収集したり整理したりする方法を学ばせる内容を、イからは多様な角度から発信される情報の価値を的確に判断する視点を養う内容を、ウからは情報を論理的に整理して効果的に伝え

る方法を学ばせる内容を、具体的な授業の形として表そうと考えた。そして最終的には、新聞の利用法、コンピュータ（インターネット）の使い方、メディア・リテラシー、ディベートの仕方、プレゼンテーションの仕方という5つの学習内容に集約されることになった。

なお、これらを指導する時間数は、学習内容の質と量を考慮してそれぞれ6時間程度を配当することが適当と考え、計30時間をあてることになった。

② 学習形態

具体的な学習内容の柱と授業の方向性が見えた後のステップとして必要なのは、これらが実現できる運営形態を考えることである。

この点に関して最初に議論されたのは、履修形態をどのようにするかということであった。上記の5つの柱の内容は、全生徒に学習させること、各柱の間にやや順序性があること（例えば、情報収集は他のどれよりも先に来る）などを考えると、すべての生徒に順序性を配慮した指導を行うことがもっとも理にかなっている。しかし、それでは指導体制や施設の点で実際性に欠けるので、結果的にはコース制を採ることが最適とされた。そして、各コースを教科学習と同様に学級単位で履修させることにした。

次に、実際の授業のコマ設定をどうするかということが議論された。すなわち、各コース6時間を連続で履修させて5コースを積み上げる形（2時間×3回×5コース）とするか、各コース2時間ずつを5コース行って、それを3セット行う形（2時間×5コース×3クール）にするかということである。これについては、すでにコース間に順序性が認められることを述べたが、ここではそれを考慮して後者の形を採ることになった。

③ 指導体制

これで「情報リテラシー」学習の授業を実現するための枠組みは揃ったことになるが、次のステップは「誰が指導するのか？」という、教師の視点から見た最も難しい問題を解決することであった。

この点に関しては、本構想を進めてきた研究部員が中心になって携わることになり、総合の1年生指導集団（1年を通して1年生の「総合」を担当する）を形成することにした。また、各コースに2名の教師を配置することとした。その主な理由は、学級単位の指導体制をとるために、2、3年生の「総合学習」に比較して生徒数が多くなること、指導したことのない未知の分野で不安が多いこと、などである。さらに、教科の特性や個人の得意分野が生かせるコースに配置すること、なども考慮することとした。そして、実際には研究部員と1年生の担任団が中心となった11名の1年生「総合」指導集団が結成された。

授業中の指導形態にも幅を持たせることにした。実際には、1) 主な指導は主担当が行い、副担当が補助に回る形、2) 完全なチーム・ティーチングで行う形、3) 学級毎に主担当者を変え、教材は共有しながらもその教師独自の迫り方で指導する形、など様々な形が出現した。

(2) 「情報リテラシー学習」の「ディベート」

本校のディベート学習がどのような過程を経て「情報リテラシー学習」の1コースとして設定されたのかは前節①に示したとおりである。そこで、本年度の「ディベート」コースの指導目標を次のように設定した。

- ① ディベートのやり方を理解し、意見を交換し合うことの意義を理解する。
- ② ディベートを実際に経験して、自分の意見を論理的に整理し、効果的に相手に伝える方法を理解する。
- ③ ディベート活動をとおして、物事を多面的かつ深く理解できるようになる。

さて、上記の指導目標からもわかるとおり、本校の「ディベート」コースの特徴は、その最終的な目標をディベートをできるようになることには置いていないことである。それは、本コースで扱うディベートはあくまでも「情報リテラシー学習」が目指す内容を具現化するための一方策として設定されたからである。すなわち、ディベートは自分が得た情報を深く理解したり、自分の考えや情報を論理的に整理して効果的に相手に伝えることを学ぶための1つの場面であると考えているからである。したがって、極論すれば、他に同様の目標を達成する方法があればそれに置き換えても構わないわけであるが、現状ではディベートがその機会を提供する最適の方法の1つと考えたのである。

また、実際に指導を行ってみると、ディベートという活動は他の4つのコースで学んだことを総合的に実践する場であるということ強く認識するようになった。それは、図書館や新聞を利用して基礎的な知識を入手し、コンピュータを駆使して最新の情報を仕入れ、それらの価値をメディア・リテラシーに照らし合わせて判断し、的確な方法でプレゼンテーションすることが求められる活動だということからである。

3. 指導計画

(1) 指導内容

本年度の「ディベート」コースの指導計画は資料1のとおりである。

基本的な指導内容は前年度のものを踏襲することにしたが、本年度の指導計画を作成する上で留意したことは次のような点である。

- ・前年度の実績を踏まえ、その指導の利点を生かすと共に指導効果の検証が行えるような内容にする。
- ・本年度の指導者の指導観や得意とする部分が活かせるような内容にする。

前年度はディベートをできるだけ多く生徒に経験させる中で活動の質を上げていくことをねらった指導内容が中心であったが、本年度は途中により細かい教師側からの指導を加えた上で最終的なゴールを目指すという指導内容の全体像を構築した。そして、各時間の主な指導内容を次のような視点で設定することにした。

- ① 第1クール（2時間）
 - ・ディベートの目的と方法を理解させる
 - ・ディベートを経験させる
- ② 第2クール（2時間）
 - ・ディベートにおける効果的な意見の作り方や発表の仕方を理解させる
 - ・最終ディベートに向けた準備をさせる
- ③ 第3クール（2時間）
 - ・過去2回の授業で学習したことを最終ディベートをとおして実践させる

資料1 平成13年度「ディベート」指導計画

情報リテラシー学習④「ディベート」学習指導計画

1 目標

- (1) ディベートのやり方を理解し、意見を交換し合うことの意義を理解する。
- (2) ディベートを実際に経験して、自分の意見を論理的に整理し、効果的に相手に伝える方法を理解する。
- (3) ディベート活動をととして、物事を多面的かつ深く理解できるようになる。

2 授業計画

- (1) 時間 6時間扱い
- (2) 内容

| 時 | 学習目標 | 学習内容・活動 | 評価の観点 |
|--------|---|---|---|
| 1 2 | <ul style="list-style-type: none"> ・ディベートとは何かを理解することができる。 ・ディベートの概略を理解することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ディベートの論題のあり方、進め方等をブレイン・ストーミングしながら理解する。 ・ある論題に対して、クラスで肯定側と否定側に別れ、意見を交換し合う。 ・審判の基本的な方法を理解する。 ・与えられたテーマでマイクロ・ディベートを行う。 | <ul style="list-style-type: none"> ・真剣に考え、自発的に発表しているか。 ・仲間の意見をよく聞き、自分の意見をまとめているか。 ・ルールを理解し、積極的に活動に取り組んでいるか。 |
| 3 4 | <ul style="list-style-type: none"> ・論理的意見の言い方を理解することができる。 ・自分の意見を支える客観的資料の重要性を理解することができる。 ・ディベートの本番に向けて見通しをもち、準備をする心構えをもつことができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ある論題に対する意見に対して、相手を説得できる論理的な意見の言い方を考えて発表し、お互いに批評し合う。 ・最終ディベートに向けて、役割分担をする。 ・新たな論題に対して相手を説得できる論理的な意見を考え発表する。 ・自分の意見の信頼性の有無を考える。 ・自分の意見を支える客観的資料の必要性を知る。 | <ul style="list-style-type: none"> ・全員が討論に主体的に参加しているか。 ・準備作業に意欲的に取り組んでいるか。 ・論理的な意見の構築ができてきているか。 ・意図しているような活動ができそうか。 |
| 5 6 | <ul style="list-style-type: none"> ・ルールに則ってディベートを行うことができる。 ・よりよい意見交換のあり方を考えることができる。 ・テーマについての自分自身の確かな考えをもつことができる。 ・学習した内容を整理することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・役割毎に最終の打ち合わせを行う。 ・ルールの確認を行う。 ・ルールに則ってディベートを行う。 ・ディベートを行っての感想を述べ合う。 ・よりよい意見交換を行うための方法を考えて発表する。 ・テーマに関して自分自身の立場で意見を発表する。 ・本コースでの学習を評価する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・各活動に真剣に取り組んでいるか。 ・自分の意見を効果的に相手に伝えられているか。 ・仲間の意見をしっかりと聞こうとしているか。 ・よりよいものを実現しようと考えているか。 ・自分自身の考えをしっかりとまとめているか。 |

3 備考

- ・導入の部分では、すべてを与えようとせず、生徒から答えを引き出すように留意する。
- ・ディベートの論題は学習目標が達成されやすいものを教師側から提供する。
- ・ルールを守ることを徹底指導し、安易な活動に流れないように注意する。
- ・ディベートの勝ち負けよりも、自分の意見を言ったり、仲間の意見を聞いたりする上で大切なことは何かを重視した指導を行い、知的に成長できた成就感を与えるようにする。

2002年3月

資料2 平成13年度「ディベート」実施記録

1年生「総合」④『ディベート』 指導内容記録

| 組 | 1年5組 | 1年1組 | 1年2組 | 1年3組 | 1年4組 |
|----|------------------|------|------------------|------|------------------|
| 担当 | (主) 肥沼 (副) 中村 | | (主) 中村 (副) 肥沼 | | (主) 肥沼 (副) 中村 |

<第1クール>

| 期 | 5/2 | 5/23 | 5/30 | 6/6 | 6/20 |
|-----|---|------|-------------------------------|------------------------------------|--------------------------------------|
| 第1時 | ①ディベートの定義 ②全体ディベート「附属中に給食制度を取り入れるべきである」 ・クラスを2つに分ける ・判定は教員が行う | | ①ディベートの定義 ②ディベートの歴史 | ③全体ディベート「附属中に給食制度を…」 | ①ディベートの定義 ②全体ディベート「附属中に給食制度を…」 |
| 第2時 | ③マイクロディベート「自分の本当の気持ちを伝えるには電話よりも手紙の方がよい」 ・(2+2+2=6)×3回 →三役すべてを経験する | | ③全体ディベート「附属中に給食制度を取り入れるべきである」 | ③のつづき ④マイクロディベート「自分の本当の気持ち…」×1回 | ③マイクロディベート「自分の本当の気持ち…」×3回→三役すべてを経験する |

<第2クール>

| 期 | 9/26 | 10/10 | 10/24 | 10/31 | 11/8・9 |
|-----|---|-------|--|--------------------------------------|-------------------------------------|
| 第1時 | ①前時の復習 ②意見を効果的に伝える方法 ・論理的意見の構築 ・論理的意見を支えるもの ・立論の言い方 | | ①前時の復習 ②「ディベート甲子園」から学ぶ | ①前時の復習 ②マイクロディベート(自主論題)の論題設定・準備 | ①前時の復習 ②最終ディベートに向けて ③論理的意見の構築 |
| 第2時 | ・反駁の言い方 ③的確な判定方法 ④最終ディベートへ向けて | | ③マイクロディベート「自分の気持ち…」×1回 ④最終ディベートへ向けて | ③マイクロディベート実施(2+2)×1回 ④最終ディベートへ向けて | 公開授業 |

<第3クール>

| 期 | 11/15 | 11/22 | 11/29 | 12/13 | 1/10 |
|-----|---|-------|----------------------------------|----------------------------------|------|
| 第1時 | ①ディベート準備 ②マイクロディベート「死刑制度を廃止するべきである」第1回(4+4+2) | | | | |
| 第2時 | ③マイクロディベート「死刑制度を廃止するべきである」第2回(4+4+2) ・対戦相手を変えて実施 ④活動のまとめ(よりよい情報発信方法、自己評価、アンケート) | | ③全体ディベート「死刑制度は…」 ・代表者が代表者席で実施 | ③マイクロディベート「死刑制度を…」第2回 ・相手を変えて | |

・ディベートをとおして学習したことをまとめさせる

(2) 指導体制

前年度は蔦田教諭が1人で全クラスの指導にあたったが、本年度は肥沼と中村の2人が共同で指導にあたることになった。肥沼は研究部員かつ1年生担任団の1人であり、蔦田教諭と同じ英語科の教師であるということから、かなり早い段階から本コースの担当者に内定していた。中村は研究部員かつ1年生の教科担当（音楽）ということと他コース担当者との兼ね合いで本コースを担当することになった。

実際に指導するにあたっては、肥沼と中村が相談して変則的なチーム・ティーチングの形をとることにした。それは、2人のうちの一方をクラス毎に主に指導する教師（主担当）とし、もう一方が支援に回る教師（副担当）として固定するというものである。その主な理由は、複数の指導者の視点で授業作りをすれば、より多彩な授業内容が創造できると考えたからである。もちろん、これによって担当者の個人的負担を平均化できるであろうというねらいもあった。

具体的には、肥沼が1・4・5組の主担当となり、中村が2・3組の主担当となることにした。この形に収束したのは、教師がもっとも指導しやすい形にするのがよいということを最優先したからであった。すなわち、常に各クールの初回にあたることになる5組は肥沼の担任学級であったので指導しやすかったこと、2・3組は肥沼が教科担当でないというハンディを中村が教科担当であることで補えたこと、最初に肥沼が5・1組の2クラスを担当したことを受けて中村が2・3組に対して改訂版を指導し、さらにそれを受けて肥沼が再改訂版を4組に対して実施できるということなどを総合した結果として決定されたのである。

4. 指導の実際

(1) 指導実績

先述の指導計画に基づいて本コースの指導を開始したわけであるが、実際に各クラスに対して各時間に指導した内容は資料2のとおりである。

実際の指導内容の詳細は後述するが、全体としては当初の指導計画作成時にねらったことをおおむね達成できたように感じる。特に、短時間の間に学習と実践をスパイラルに組んだことによる最終ディベートの仕上がり具合や、主担当者が担当クラスを固定しつつも交代制をとったことによる相互作用などという点では大きな成果があったと言える。

(2) 授業展開

ここでは、肥沼が担当した授業の指導案をもとに各授業の詳細を示し、そこに中村が実施した授業の改善点を追記する形で考察を進めることにする。

① 第1クールの授業（第1時・第2時）

◇授業のねらい

本授業では、第1時にディベートとは何かを理解させるために、自作のワークシート（資料7）を使って生徒の頭の中にディベートのイメージを作らせようとした。次に、それをもとに全体を2つに分けたディベートを試行して、ディベートの感触をつかませようとした。そして、第2時

資料3 第1クール第1・2時(通算1・2時間目)の指導過程案 ※肥沼の1クラス目の授業

| 時 | 指導内容 | 備考 |
|-----|--|--|
| 第1時 | <p>1 動機付け</p> <p>(1) 本コースの内容について ・何を学習するのか?</p> <p>(2) ディベートの経験の有無の調査 ・有の場合、その論題は?</p> <p>2 ディベートの定義</p> <p>(1) ディベートとは何か?</p> <p>① 宿題の確認(オリエンテーション時に出したもの)</p> <p>② 定義のまとめ</p> <p>③ ディベートの特徴(ディベートを定義付ける4つの要素)</p> <p>(2) 育ててほしい力</p> <p>① 10項目について空所を埋めさせる</p> <p>② 答えの確認→解説</p> <p>(3) ディベートの流れ</p> <p>① 提示、用語の解説</p> <p>② 本校バージョン</p> <p>(4) フローシートの書き方</p> <p>① 使い方</p> <p>② 意見の書き方(番号、キーワード等)</p> <p>(5) 審判の注意</p> <p>① 審判の役割</p> <p>② 判定を行う際の留意点</p> <p>3 全体ディベートの実施</p> <p>(1) 論題提示:「附属中学校に給食制度を導入するべきである」</p> <p>(2) 方法提示</p> <p>① 役割分担(クラスを肯定側と否定側に二分)</p> <p>② 内容・所要時間(個人意見、各側3分、書記:学級の係)</p> <p>(3) 立論相談</p> <p>(4) ディベート実施</p> <p>① 立論 ② 作戦タイム ③ 反駁</p> | <p>・問いかける</p> <p>・問いかける</p> <p>・発表させる</p> <p>・ワークシートNo.1配布</p> <p>・発表させる</p> <p>・フローシート配布</p> <p>・板書</p> |
| 第2時 | <p>(5) 教師による判定</p> <p>① 結果の発表</p> <p>② 判定理由の発表</p> <p>4 マイクロディベートの実施</p> <p>(1) 論題提示:「自分の本当の気持ちを伝えるには、電話よりも手紙の方がよい」</p> <p>(2) 方法提示</p> <p>① 役割分担(肯定2、否定2、審判2のグループ)</p> <p>② 内容・所要時間(三役持ち回り、各側2分)</p> <p>③ 座席配置(説明→移動)</p> <p>(3) ディベート実施 ※以下の内容を3サイクル</p> <p>① 相談</p> <p>② 立論</p> <p>③ 作戦タイム</p> <p>④ 反駁</p> <p>⑤ 判定</p> <p>5 本時のまとめ</p> <p>(1) 感想発表 ・面白かったところ ・難しかったところ</p> <p>(2) 感想執筆</p> | <p>・フローシート配布</p> <p>・タイムキーパーは教員</p> <p>・進行は審判</p> <p>・発表させる</p> <p>・フローシートの裏側利用</p> |

に少人数グループによるマイクロ・ディベートで各役割を体験させ、ディベートの楽しさ・難しさを感じ取らせようとした。

なお、全体ディベートの論題として「附属中に給食制度を導入するべきである」を、マイクロ・ディベートの論題として「自分の本当の気持ちを伝えるには、電話よりも手紙の方がよい」を採用したのは、前年度の成果を踏襲したためである。

◇指導案（資料3）

◇実施状況

授業中の生徒の様子は大変意欲的で、授業の最後にとったアンケートにもそれが表れていた。しかし、肥沼の授業では、コース全体のねらいと総時間数から割り出した本時の指導内容があまりにも多く、予定された内容をすべてこなすはしたものの、そのことによる授業展開のスピードについていけない生徒も若干見受けられた。

そこで、中村は指導内容を厳選して、ディベートそのものに対する理解を深めさせることに多くの時間を費やした。肥沼が作成したものに加えて自身が作成したワークシート（資料8）を使い、ディベートの歴史なども話題にしながらじっくりと指導した。また、1つ1つのことがらに対して生徒に質問を投げかけ、その発言をとらえた上でねらっている方向へと進めるようにした。結果的には中村の授業ではクラスによって進度が大きく異なってしまったが、その分生徒の充実感や肥沼の授業よりも大きかったかもしれない。それを受けて、肥沼も最終の4組の授業では学習場面に費やす時間を極力短くし、ディベート活動に費やす時間を多くとるようにした。

② 第2クールの授業（第3時・第4時）

◇授業のねらい

第2回の授業は、第1回で指導しきれなかった点の補完と最終的なディベートを行うための準備の指導にあてることにした。前者については、ディベートを行うにあたっての論理的な意見の言い方と的確な判定の方法を学習させることに主眼を置き、後者については、論理的な意見を支える証拠の提示の重要性を理解させることに重点を置いて指導することにした。また、特に研究協議会の公開授業では、よりよいディベートを行わせるための細かいステップを提案できる指導過程を見せられるようにした。

◇指導案（資料4・5）

◇実施状況

本授業は、指導内容・技術共にもっとも指導者の腕を問われるものと思われた。その理由は、第2回は最終の第3回において高いレベルで生徒にディベートを行わせるために、確実に生徒の技能をステップ・アップさせるような授業内容を組まなければならないからであった。そこで、今回はディベートを行わせることを避け、第1回の指導で足りなかったと感じたことと最終ディベートに向けて押さえておきたい内容を丁寧に指導するようにした。これら一連の指導は、最終の4組に対して行った公開授業において参観者に大変好評で、細かいステップを踏んで指導することに対する理解を得られたようであった。

中村も、基本的には第1回の授業で指導しきれなかった部分の補完をすることに重点を置いた指導を行った。また、第1回の授業時にマイクロ・ディベートを実施できなかった3組については、論題そのものをグループ毎に生徒に設定させるという活動を設定し、生徒を生き生きと活動

資料4 第2クール第1時(通算3時間目)の指導過程案 ※肥沼の5クラス目の授業

| 指導内容 | 備考 |
|---|--|
| <p>1 動機付け</p> <p>(1) 本時の内容について</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 前回の復習 ② 最終ディベートに向けて ③ 意見の言い方・判定の仕方の学習 <p>2 前回の復習</p> <p>(1) ディベートの4つの特徴(穴埋め→答え合わせ)</p> <p>(2) 育ててほしい力(確認のみ)</p> <p>(3) ディベートの流れ(穴埋め→答え合わせ)</p> <p>(4) フローシートの書き方(確認のみ)</p> <p>(5) 審判の注意(確認のみ)</p> <p>3 最終ディベートの説明</p> <p>(1) 論題提示</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 論題内容 ② 論題の意義 <p>(2) 方法提示</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 役割 ② 内容・所要時間 ③ グループ分け <p>(3) グループ別役割決め</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 説明 ② 役割決め(グループ毎) <p>4 次回の授業に向けて</p> <p>(1) 授業の内容</p> <ol style="list-style-type: none"> ① プレ・ディベート →とにかく意見を言ってみる。(個人) →とにかく判定を試してみる。(個人) ② よりよいディベートの方法を考える <p>(2) 準備すること</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 1つの視点に絞って自分の意見を書いてくる ② 事前に自分の側の仲間の意見を読んでおく <p>(3) 意見構築の視点</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 死刑制度とは何か?(定義の確認) ② 論点はどこにあるのか?(論点の提示→整理) <p>5 意見の言い方</p> <p>(1) 日常生活で相手を説得する場合</p> <p>「ねえ、ねえ、買って!買って!」(主張)</p> <p>「だって、〇〇も◇◇も持ってるもん!」(理由)</p> <p>(2) 立論の場合</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 主張をはっきりさせる ② 理由をはっきりのべる <p>(3) 反駁の場合</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 相手の議論にふれる ② 要点を述べる ③ 理由を説明する ④ 重要性にふれる <p>6 判定の仕方</p> <p>(1) 判定基準</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 主張をはっきりしているか ② 理由をはっきり述べているか ③ 話す速さや声の大きさは適切か <p>(2) 留意事項</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 判定基準にそって自分なりに点数化してみる ② 合計点だけでなく、総合的な印象も大切に <p>7 諸連絡</p> <p>(1) 座席位置</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 説明 ② 確認(※全生徒が理解できているか) <p>(2) 準備すること</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 意見を考えてくること(肯定・否定) →書いてくる(1分以内で話せる内容) | <p>・WS1使用</p> <p>・実物投影機使用</p> <p>・報告用紙</p> <p>・フローシートの裏側利用</p> <p>・実物投影機使用</p> <p>・実物投影機使用</p> <p>・実物投影機使用</p> <p>・実物投影機使用</p> |

資料5 第2クール第2時(通算4時間目)の指導過程案 ※肥沼の5クラス目の授業(公開授業)

| 指導内容 | 備考 |
|---|---|
| <p>1 動機付け</p> <p>(1) 授業の「つかみ」</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 日本語のあいさつ ② 英語のあいさつ <p>(2) 本時の内容について</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 前回提示した論題について意見を言ってみる ② よりよいディベートを行う方法を学ぶ ③ 最終ディベートへ向けての準備をする <p>(3) 学習資料の配付について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日学習することはすべてプリントして渡す →ノートをとる必要なし。しっかり聞いて考える <p>2 プレ・ディベート</p> <p>(1) 論題の確認</p> <p>「死刑制度は廃止するべきである」</p> <p>(2) 活動内容の説明</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 立論意見発表 <ul style="list-style-type: none"> ・肯定側、否定側の順に各チーム代表者が1分以内で立論意見を述べる(全員が意見を考えてきているから、自分の意見と対比させながら聞く) ② 立論意見発表だけで判定する <ul style="list-style-type: none"> ・審判は4×4の立論を聞いてどちらが勝ちかチーム毎に相談して判定し、その結果と理由を述べる ・否定側、肯定側も個人的に客観的立場で判定する (3) 留意点 <ol style="list-style-type: none"> ① 意見を言う際 <ul style="list-style-type: none"> ・「主張」と「理由」をしっかり述べる ・声の大きさ、速さなども重要 ② 意見を聞く際 <ul style="list-style-type: none"> ・意見はフローシートに番号をつけてメモする(A-1のように番号をつけて整理する) ③ 判定する際 <ul style="list-style-type: none"> ・主張2点、理由2点、話し方2点、プラス要因2点の8点満点で採点 ・個人で採点してから、2人で相談して結論を出す (4) 立論発表 <ol style="list-style-type: none"> ① 肯定側(1分×4) ② 否定側(1分×4) (5) 判定 <ol style="list-style-type: none"> ① 判定準備(相談) ② 判定発表(一斉表明) ③ 判定理由発表 (6) 教官判定 <ol style="list-style-type: none"> ① 判定発表 ② 判定理由発表 <ul style="list-style-type: none"> ・プラス得点のみ発表して、理由は秘密 <p>3 論理的意見を支えるもの</p> <p>(1) 意見の言い方の復習</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 日常会話の例 ② 討論の例 <p>(2) 論理的意見を支える証拠</p> <ol style="list-style-type: none"> ① (1)②をより説得力のある意見にするもの <ul style="list-style-type: none"> ・「みんなで渡れば怖くない」の目撃例 | <ul style="list-style-type: none"> ・授業の雰囲気作り ・内容を投影機で示す ・現物を見せる ・論題を投影機で示す ・内容を投影機で示す ・押さえる2点を問う ・大切な点を問う ・観点を投影機で示す ・2分間 ・判定方法提示(挙手) ・内容を投影機で示す ・内容を投影機で示す |

| | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ② (2)①をさらに説得力のある意見にするもの <ul style="list-style-type: none"> ・より客観的なデータの提示 ③ 教師の判定理由の説明(本話題に関連して) (3) ディベートで意見を言う際の基本のまとめ <ul style="list-style-type: none"> ① 3要素(「主張」「理由」「データ」) ② 「政策論題」の立論構成→5点を紹介 <ul style="list-style-type: none"> ※今回のディベートでは「哲学」「問題分析」「メリット」の3点を述べる ③ 教師の判定理由の説明(本話題に関連して) ④ 反駁の際の意見の言い方 | <ul style="list-style-type: none"> ・内容を投影機で示す ・項目を投影機で示す ・項目を投影機で示す ・3点のみ示す |
| <p>4 ディベートの実例鑑賞(「ディベート甲子園」)</p> <p>(1) ビデオ内容紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 論題の理解「サマータイム制を導入すべき」 <ul style="list-style-type: none"> ・「サマータイム制」とは? ・どのような効果があると思うか? ② 鑑賞の視点 <ul style="list-style-type: none"> ・①で出たような内容が述べられるか ・政策論題の立論構成になっているか ・データの紹介をどのようにしているか <p>(2) ビデオ鑑賞</p> <p>(3) ビデオから学んだこと</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・タイトルが出たところでビデオを止める |
| <p>5 最終ディベートへの準備</p> <p>(1) ディベートに向けて必要なこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 準備の必要性 <ul style="list-style-type: none"> ・本気で勝つにはかなりの準備が必要 ・準備なしでは手に負えない論題 →どのような視点で何が議論されているのか ② 準備すること <ul style="list-style-type: none"> ・証拠資料を集める(意見だけではダメ) ・立論意見を書いてくる(証拠資料がないとダメ) →最終打ち合わせは次回の授業の最初にとるが、基本的な準備がないと戦えない ③ 準備の仕方 <ul style="list-style-type: none"> ・図書館の利用(書籍検索) ・インターネットの利用(キーワード検索) →無数のホームページ(使う資料は慎重に選択) ・購入済み書籍の利用(英語科準備室前の机の上) <p>(2) 準備作業</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 説明 <ul style="list-style-type: none"> ・各チーム毎に、どのような視点で立論を立てるかを話し合い、必要な資料を話し合う(資料の有無も考えて複数の視点で立論する) ・審判は先生の所に集まって講習会 ② 話し合い <ul style="list-style-type: none"> ・肥沼は審判の指導 ・中村は話し合いの巡回指導 | <ul style="list-style-type: none"> ・立論シート配布 ・何が使えるかを言わせる ・視点を引き出させて黒板にはる ・審判マニュアル ・残り時間3分でやめる |
| <p>6 諸連絡</p> <p>(1) 授業日の連絡</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最終回は1月10日 ・その日に最終ディベートを行う ・時間はたっぷりあるので、十分なりサーチを <p>(2) 学習資料配付(前時と本時の2時間分の記録)</p> <p>(3) 質問受付</p> | |

させることに成功した。

さて、全3クールの授業の中で、クラスによって指導内容に最も大きな差が出たのがこの第2クールの授業であった。その主な理由は、よりよいディベートを行わせるために何をどのように指導したらいいのかということに対して指導者側にやや大きな揺れがあったためである。そのことによって最初のクラスを指導する前に指導内容が確定できず、結果的には実際に授業を行いながらそれを修正していくことになった。しかし、それはある意味では回を重ねる毎に授業内容をよりよくしていく道として適切であったとも言えよう。授業は、試行錯誤を繰り返しながら内容・指導法共に向上させていくべきものであり、最初のクラスと最後のクラスで差が出たとしてもやむをえないであろう。したがって、生徒に配布する資料やワークシートも最初に全クラス分を用意するのではなく、回を重ねる毎にバージョンアップしたものを使用するようにした。実際、最終クラスの4組が指導者としては最も納得のいく授業ができたと感じている。

③ 第3クールの授業（第5時・第6時）

◇授業のねらい

第3回の授業では、それまでの学習のまとめとしてのディベートを行うことにした。過去2回（4時間）の授業で学習したことを生かし、小グループ（肯定側4人、否定側4人、審判2人の計10人）でディベートを行うというものである。最終の活動で全体ディベートを採用しなかったのは、個人が実質的に活動する時間をできるだけ多く保証することを重視したからである。ディベートの運営は、タイム・キーパーを指導者が担当する以外のほとんどを各グループに任せる形を採用した。これは生徒の力を信じて自主的な活動を重視するという本校の校風に則った手法に従ったものであるが、それ以外にも、それまでに指導した内容がどれだけ生徒に浸透しているかということを試す意味合いもあった。

また、十分な活動時間を確保して、複数回ディベートを実施できるようにした。これによって、初回の活動の反省を次回の活動に生かしたり、事前に準備してきたことをできるだけ多く利用したりする機会を与えることができるようになった。

さらに、ディベート終了後に本時の活動およびコース全体に関する感想を自由記述方式で書かせ、生徒にとってディベートが何を意味するのかを探ろうとした。

なお、最終ディベートを行うにあたって「死刑制度を廃止すべきである。」という論題を設定したのは、この論題がディベート論題としてよく認知されていることと、比較的資料を入手しやすいという理由からである。

◇指導案（資料6）

◇実施状況

今回の授業でディベートを行うにあたっては、事前にどのような準備をしてくるかが活動をしっかりと行うためにとても重要なポイントであった。前回の授業では、最後の部分でその点を強調したが、各クラスとも授業日の数日前と前日にその再確認を行って、準備をしっかりと行うことを義務づけた。当日は、その甲斐があつてほとんどの生徒が何らかの準備をしてきてディベートに臨んだが、クラスに数名ずつ何の準備もしてきていないと思われる生徒がいたのは残念であった。また、準備をしてきた生徒でもその程度には個人差があり、資料をただ集めてきただけの者や立論を書いてきただけの者から、資料と立論の両方ををしっかりと準備してきている者まで

資料6 第3クール第1・2時(通算5・6時間目)の指導過程案 ※肥沼の1クラス目の授業

| 時 | 指導内容 | 備考 |
|-----|---|--|
| 第1時 | <p>1 導入</p> <p>(1) 本時の活動内容</p> <p>① マイクロディベート実施</p> <p>② 1回目の反省を生かして2回目のマイクロディベート実施</p> <p>③ ディベートに関する学習のまとめ</p> <p>(2) 論題の確認 「死刑制度を廃止するべきである」</p> <p>(3) 準備用座席の移動</p> <p>① 提示 ② 移動</p> <p>(4) 最終準備</p> <p>・肯定側・否定側：立論意見相談、役割分担</p> <p>・審判：審判の仕方講習会(教師を囲んで最終確認)</p> <p>2 マイクロディベート①の実施</p> <p>(1) 立論(各3分)</p> <p>① 肯定側</p> <p>② 否定側</p> <p>(2) 作戦タイム(2分)</p> <p>(3) 反駁(各3分)</p> <p>① 否定側</p> <p>② 肯定側</p> <p>(4) 判定(①2分 ②1分)</p> <p>① 判定相談(その間、肯定・否定側は場外討論)</p> <p>② 判定発表</p> | <p>・問いかける</p> <p>・問いかける</p> <p>・実物投影機で位置表示</p> <p>・フローシート配布</p> <p>・審判用フローシート配布</p> <p>・タイムキーパーは教員</p> <p>・進行は審判</p> |
| 第2時 | <p>3 改善案の相談</p> <p>(1) 第1回の反省</p> <p>① 不都合な箇所を挙げさせる</p> <p>② 具体的改善案を考えさせる</p> <p>(2) 改善案の確認</p> <p>4 マイクロディベート②の実施</p> <p>(1) 対戦相手の変更</p> <p>・肯定側、否定側、審判ともに重なりがないように入れ替え</p> <p>① 指示 ② 座席移動</p> <p>(2) ディベートの実施</p> <p>・3(2)で確認された方法で実施する</p> <p>5 活動のまとめ</p> <p>(1) 本時の活動について</p> <p>① 感想執筆</p> <p>② 利用した資料の報告</p> <p>(2) コース全般について</p> <p>① 感想発表</p> <p>② 感想執筆</p> | <p>・発表させる</p> <p>・フローシートの裏側利用</p> <p>・発表させる</p> |

いた。中には、実際の発言とともに引用資料とその提示のタイミングや予想される反駁意見まできちんとワープロで原稿を作ってきている生徒もいた（資料12）。なお、資料の入手先は約3分の2がインターネットから、約3分の1が書籍からであった。

肥沼の1, 2クラス目の授業では、1時間目に最終的な打ち合わせの時間を若干取った後で1回目のディベートを行い、2時間目は対戦相手を変えて同じ論題による2回目のディベートを行った。1回目を終了した時点で改善点を生徒に相談したところ、立論・反駁共に持ち時間が短すぎて（前者3分、後者2分）、十分に意見を言うことができないという指摘が多かった。そこで、生徒のそのような強いやる気を生かすために、2回目はそれぞれ1分ずつ延長して行った。また、最後に本時の活動とコース全体に対する感想を自由記述式で書かせたところ、どの生徒もディベートに対する熱い思いを書きつづっていた。その詳細については後述の考察を参照されたい。

中村は、肥沼の2回の授業を受けて、2回目のディベートをマイクロ・ディベートとせずに各グループの代表者による全体ディベートとした。その理由は、肥沼の授業後に数名の生徒がレベルの高い活動をしている仲間の活躍振りも見てみたいと話していたからだという。そこで、最初の組では、2回目を行う際に各グループからそれぞれ互選で1名の代表者を出し、その代表者が教室の前方に設置された代表者席で個々の意見を述べ、その様子を残りの生徒全員で判定するという活動を行った。さらに、2つ目のクラスでは、代表者を自分のグループ席に残したまま発表させ、班員の意見を吸い上げながら意見を構築できるように工夫した。中村のこの実践に対して、肥沼も最後のクラスで2回目のディベートを中村方式で行うことを検討したが、結局は肥沼自身の前2回と同様にマイクロ・ディベートとした。それは、中村が強調する点よりも全生徒に再度ディベートの実際を経験させることを優先したからである。

5. 考察

(1) 研究部実施の調査結果より

表1は、本年度の「情報リテラシー学習」5コースの学習内容に関するアンケート調査結果である。本調査では、生徒が各コースの学習内容に対してどのような印象をもったかを5つの観点（①～⑤）で問い、答えを選択肢から選ばせる方式で生徒の本学習に対する満足度を調べた。なお、質問⑥についてのみその理由を自由記述で答えさせた（⑥）。

それによれば、本コースの学習に対する印象は、他の4つのコースの学習に対するそれと比較して顕著な特徴が表れている。つまり、質問の切り口によって5コースの中ではもっとも極端な結果が出ているのである。具体的には、「わかりやすさ」では他を大きく引き離しての1位、「楽しさ」ではコンピュータに続いての2位、「意欲」はコンピュータと同率の1位、そして「自由研究に役立つか」は他を大きく引き離しての最下位である。すなわち、5コースのうちでは最も充実した気持ちで学習に臨むことができた一方、「情報リテラシー」学習と並行して行っていた自由研究を進めるにあたっては、直接役に立つとは感じなかったようである。このような結果が出た主な原因としては、ディベートは他のコースに比べて具体的な活動場面が多かったこと、ゲーム的な要素によって高揚感を感じやすかったこと、学習目標は個人内努力よりも仲間との関連をとおして達成されるものであったことなどが考えられる。また、「将来役に立つか」という問いに対して、ディベートを含む4コースがコンピュータほど高い評価が得られなかったが、それ

2002年3月

表1 平成13年度第1学年「情報リテラシー学習」に関するアンケート調査結果

| 質問 | 答えの選択肢 | A | B | C | D | E |
|--------------------------------|-----------------|-------------|------|------|------|------|
| ① コースの学習内容はわかりやすかったですか？ | 大変わかりやすかった | 35.1 | 44.1 | 27.7 | 55.4 | 31.2 |
| | わかりやすかった | 52.0 | 39.6 | 54.0 | 39.6 | 50.0 |
| | 少しわかりやすかった | 12.4 | 10.4 | 17.8 | 5.0 | 15.8 |
| | あまりわかりやすくなかった | 0.5 | 5.9 | 0.5 | 0.0 | 3.0 |
| ② コースの学習内容は楽しかったですか？ | 大変楽しかった | 26.2 | 71.8 | 21.3 | 55.4 | 31.2 |
| | 楽しかった | 51.5 | 22.3 | 50.1 | 42.6 | 49.5 |
| | 少し楽しかった | 20.8 | 3.5 | 23.3 | 5.9 | 23.3 |
| | あまり楽しくなかった | 1.5 | 2.5 | 4.5 | 2.0 | 5.9 |
| ③ コースの学習には意欲的に取り組みましたか？ | 大変意欲的に取り組んだ | 23.3 | 50.0 | 22.3 | 50.0 | 25.2 |
| | 意欲的に取り組んだ | 60.9 | 44.1 | 59.9 | 42.6 | 52.5 |
| | 少し意欲的に取り組んだ | 14.9 | 4.5 | 16.3 | 4.0 | 19.3 |
| | あまり意欲的に取り組まなかった | 1.0 | 1.5 | 1.5 | 3.5 | 3.0 |
| ④ コースの学習内容は自由研究を進める上で役に立ちましたか？ | 大変役に立った | 28.7 | 44.1 | 31.2 | 11.4 | 29.7 |
| | 役に立った | 41.6 | 33.2 | 41.6 | 34.2 | 34.7 |
| | 少し役に立った | 21.8 | 16.8 | 21.8 | 30.7 | 26.7 |
| | あまり役に立たなかった | 7.9 | 5.9 | 5.4 | 23.8 | 8.9 |
| ⑤ コースの学習内容は将来役に立つと思いますか？ | 大変役に立つと思う | 49.5 | 72.8 | 43.1 | 42.6 | 35.6 |
| | 役に立つと思う | 43.1 | 21.8 | 46.5 | 37.1 | 42.6 |
| | 少し役に立つと思う | 6.4 | 3.0 | 9.9 | 13.9 | 16.8 |
| | あまり役に立つと思わない | 1.0 | 2.5 | 0.5 | 6.4 | 5.0 |
| ⑥ ⑤でそう応えた理由は何ですか？ | (自由記述) | (自由記述のため省略) | | | | |

<凡例> A:メディア・リテラシー B:コンピュータ C:プレゼンテーション
D:ディベート E:新聞・図書館

<備考> ・調査日時:1月17日(木)「総合」の時間(「情報リテラシー学習」最終回の1週間後)
・調査人数:202名(3名欠席)
・数字は%表示である。また、小数点第2位を四捨五入したため、合計が100%になっていない項目もある。

はこれら4コースの内容がコンピュータほど具体的な技能習得を目指したものではなかったためであろうということが生徒の自由記述からうかがわれる。

なお、昨年度も同内容の調査が行われたが(昨年度は①～④のみ)、そこでも本年度のものと同様の傾向を示していたことを追記しておく。

(2) コース独自の調査結果より

本コースでは、第1回の授業後と第3回の授業後にそれぞれ自由記述式の感想を生徒に書いてもらった。前者は、ディベートというものに対する初期の印象を知るためと第2回の授業を構築するための情報収集の目的があった。それに対して後者は、最終ディベートを行った時点での生徒の成就感と本コースの内容に対する生徒側の評価を知ることを目的としていた。自由記述式であるために、統計的な裏付けを得ることはできないが、その言葉からはほぼ全員の生徒がディベートという活動に強い関心をもち、かつ実際に活動した内容に対して満足している様子がうかがわれた。もちろん、これは授業中の生徒の表情や行動からも予想できることであった。例えば、ディベートを行っているときの生徒の表情は実に生き生きとしており、正規の活動時間が終了してからも活発に意見を交換し合っているというような状況が見られた。

以下は、生徒が書いた感想の一部を抜粋したものである。

① 第1回の活動に対する感想(第1回終了時にとったもの)

- ・小学校の時にディベートをやったことがあるので、ディベートについては知識があると思っていましたが、今回、本当のディベートというものを知ることができ、とてもおもしろかったです。
- ・今まで持っていた考えを捨て去って、中立的な立場から客観的に物を見ることは大変ではあったが、今の僕に必要な物だったと思う。日常の会話の中でも相手の話をよく聞き、それに対する答えを出すことは大切なので、本当に今日のものは役に立った。
- ・日本語の使い方を学ぶ場、自分の意見を述べるコミュニケーションの場などに非常に深く関わってくることだと思った。
- ・今回、自分の言いたいことを相手に伝えることの難しさ、伝える時のポイントを学んだ気がします。
- ・自分の意見の出しやすい方の反対派となって考えるのは大変難しいと痛感しました。だけど、その難しい意見を考えるのは大変楽しかったです。
- ・とても楽しかった。みんなの意見を知ることができるし、自分の見つけた点はあっているか間違っているのかも知ることができる。
- ・道徳的、だと思いましたね。別に「思いやり」だとかじゃなくて、話し合い・意見のぶつかり合いが。
- ・今回は2回とも自分が思っていた立場と反対の立場だったのですが、相手が思っている立場に立ってみて、こんなことを思っているのだと感ずることで、自分には少し足りない相手の立場に立って考えるということがやしなえるなと思いました。

② 第3回の活動に対する感想(第3回終了時にとったもの)

- ・かなりヒートアップしたディベートを楽しみました。

- ・今日のために集めた資料やデータを十分に活用できたし、ルールを守り、正しい言葉使いができたと思う。
- ・今日の活動は本当に楽しかった。自分の集めた資料で戦うのはおもしろい。
- ・今日の活動は、ほとんどの人が意欲的に取り組んでいると思いました。
- ・審判はとても難しかったです。点数をつけるのも難しく、最後に勝敗を決めるときは総合的に見て勝敗をつけました。
- ・一言でとても難しかったです。私は話すこととか説明が下手なので、立論のときも反駁のときも「えっ、どうすればいいの？」とパニック状態になってしまいました。
- ・楽しかった！！やりだすとハマってしまう！ちょっと熱がはいりすぎたかも・・・。
- ・私は審判という立場で参加したのですが、2つの意見を同じ立場で見るということを学べたと思います。
- ・グループ内での協力がちゃんとできていたのでとても楽しかったです。
- ・今回はディベートというのがとても難しいということがわかった。それは反駁の難しさだ。反駁というのはその場で考えるということがよくある。その場の発想が大きく勝ち負けに左右したと思う。
- ・今回のディベートをやってみて、本当に死刑制度が良いのかどうかを考えさせられました。
- ・私は審判だったのですが、前回の資料なしの時とは大分ちがうなと思いました。2回目のときは、ビデオで見たときと同じような言い方の人とがいて、かなりハイレベルでした。

③ コース全体に対する感想（第3回終了時にとったもの）

- ・正直、総合の授業の中で一番好きだった。
- ・楽しかった！小学校の時にやったのよりもすごいレベルが高くてやりがいがあった。
- ・知識的なことではなく、とても基本的かつ一番大切なところが身につくコースだと思います。
- ・僕は総合の中で一番このディベートが好きでした。みんなで作戦を立てたり、いろいろな資料を集めることによって、そのテーマをくわしく知れるからです。
- ・この活動は将来役に立つとぼくは思います。I like ディベート very much!
- ・ディベートの授業を通して、今まであまりみんなの前でしゃべれなかった私も、すらすらと言えるようになったし、資料集めのときも、いろいろ工夫してできたので、これからは役立ちそうです。
- ・ディベートコース全体を通して、物をいろいろな角度から見ることに、肯定、否定両方の立場から考えることに、証拠（資料）の使い方など、様々なことを学ぶことができました。
- ・今回は最後というのは本当に本当に悔しいし、悲しいです。ディベートを通して、いろいろなものの考え方、ものの見方が変わってきたと思います。
- ・これは本当に面白かった。反駁する時のきんちょう感。判定される時の不安。私はかなり本気でやっていて、本気で意見をぶつけた。
- ・今回の授業は、今までとは全く違うような「新しい授業」が受けられてとても良かったです。

(3) 本コースの指導内容に関して

「1 はじめに」でも述べたように、本コースの指導内容はまさに担当者の試行錯誤の末にで

きあがったものであった。教材研究用の資料としては、ディベートに関する書物も少なくはないが、いわゆる教室ディベートを想定していないものや、ディベートを行わせること自体に目的を設定しているものがほとんどで、本校のような「情報リテラシー学習」の一貫としてディベートを指導するには、まったく新しい視点で一から指導内容を構築していく必要があった。ただ、前年度に前出の蒔田教諭が行った実践があったので、ある時はそれをモデルとして、またある時はそれを比較検討の対象として利用することができたのは幸運であった。

また、各授業の間のインターバルがかなり大きかったことは、指導計画の作成に大きな影響を与えた。すなわち、第2回、第3回では、前時の学習内容を想起させるための復習に費やす時間を大きくとらなければならなかったことや、各回の授業をある程度“完結型”の内容にする必要があったことなどがそれにあたる。前者に関しては、具体的には第1回と第2回の間が約5ヶ月、第2回と第3回の間が約2ヶ月のブランクがあったので、前回の内容を総復習する必要があったのである。また、後者に関しては、時間切れによって教えられなかったことを補完する時間はないことから、教えるべき内容はできるだけ授業の前半で完了してしまっただけ活動を後半に集中させたり、予定した指導内容を分刻みでこなす指導計画を立てたりせざるをえなかった。ただし、2回目と3回目の間に長めの時間があつたことは、ディベート用の資料集めをするためには好都合であつたようである。

さて、以上のような全体の指導内容について、指導者としては大変満足している。もちろん、それはディベート指導を行うにあたって自分たちの指導が最適の内容であつたとか、それ以外の指導は考えられないというようなものでは決してない。あくまで、「情報リテラシー学習」の中のディベートというものの指導目的と、実施日や集団のサイズ等の諸条件を考えたときに、収束するであろう内容にたどり着けたのではないかという自負から来るものである。

(4) 本コースの指導体制に関して

本論文の副題にもあるとおり、平成13年度の本コースの指導は主・副担当交代制のチーム・ティーチングという変則的な体制で行った。そのねらいやそこに至るまでの議論は2(1)③に詳述したが、ここでは授業を終了した時点での本指導体制の評価について述べることにする。

本指導体制を採ったことの利点は大きく分けて3点あつたと考えられる。1つは、準備のしやすさであつた。一般に、チーム・ティーチングでは複数の教員が指導過程の詳細あるいは概略まで議論をした上で指導案を作成し、各場面での役割の分担までを決定した上で実施するという印象がある(本校英語科の場合はそうである)。しかし、職員室を持たず教科準備室制を採っている本校では、異教科の教員同士が打ち合わせの機会を作るのが大変難しい状況となっている。実は、すでに20年以上前に、本校に於いて教科枠を越えた教員同士による「総合学習」が行われていたのであるが、志半ばにおいて頓挫してしまつたのも同様の理由からであつた。そこで、本年度は各回の基本的な指導内容を肥沼が作成して最初の2クラスを主担当として指導し、中村がそれをもとに修正を加えて自身の担当クラス用の指導内容を決定するという体制を採つた。これによって、準備はそれぞれの担当者の都合で自由に進めることができた。

2つ目は、主に担当するクラスを固定したことで、そのクラスの指導内容に関しては全ての回を通して一貫性を持たせることができたことであつた。主担当が途中で変わってしまうと、どう

しても指導の力点が不安定になり、生徒も困惑してしまうことになるが、それぞれの担当者が最後まで責任をもってそのクラスを指導できたことで、生徒も安心して取り組むことができたようである。

3つ目は、指導者が互いの指導内容や指導方法を客観的な立場で見ることができたために、途中で授業内容を修正しやすかったことであつた。先にもふれたが、中村は肥沼が続けて2クラスを指導した内容を観察し、よい部分は踏襲しながらも改善すべき点は大胆に変更を加えた。もちろん、もともと専門教科がちがったり指導者がちがったりすれば授業観や生徒観もちがうわけであるから、この変更は至極当然のこととも言えるが、結果的にはこれが本コースの指導レベルの向上に大きな影響を与えることになった。そして、再び5クラス目の主担当に戻る肥沼は、中村の実践を踏まえて両者のよい部分を融合させた指導を行うことができたのである。

一方、本指導体制の欠点を挙げるとすれば、授業中の実際の指導は「チーム・ティーチング」とは言えないものだったことであろう。これは利点で挙げたことの裏返しでもあるが、指導内容は主担当が考えたものを十分な打ち合わせをせずそのまま実施したので、副担当は主担当に指示されるまで、授業の中身に食い込むことができなかつた。時には終始観察者になってしまうこともあり、生徒個人によりきめ細かな指導を行うことができるというチーム・ティーチングの利点は本指導体制下では生かすことができなかつた。

(5) ディベートの論題設定に関して

本コースで扱うディベートの論題は、中村があるクラスの2回目の授業で実施した時を除いて、すべて教師側が与えたものであつた。これは、授業時間の関係から論題を生徒に決めさせる余裕がなかつたこと、ディベートの論題としてふさわしいものを生徒自身の力で設定できるか不安があつたこと、全体計画の中で指導レベルに合った論題を設定しなかつたことなどの理由によるものである。本年度の各回の論題とその設定理由、そしてそれを実際に行つての印象は以下のとおりである。

① 第1回の全体ディベート：「附属中学校に給食制度を導入すべきである。」

これはよく「給食がいいか弁当がいいか」というテーマで小学校でも盛んに行われているものである（ただし、正確には「～のどちらがいいか」ではディベートの論題ではない）。本校では給食がないが、全員が小学校で給食を経験してゐるので、いずれの立場でも実経験をもとに議論しやすいと考えて設定した。授業ではほとんど全員の生徒が活発に発言し、ディベートの導入用としてはまさに最適の論題の1つと思われた。なお、肯定側・否定側のどちらになるかは、座席位置によって強制的に割り振つた。

② 第1回のマイクロ・ディベート：「自分の本当の気持ちを伝えるには、電話よりも手紙の方がよい。」（一部クラスでは第2回に実施）

ここ2、3年で急速に普及した携帯電話の利用は、本校の1年生の間にもかなり浸透しており、もはや生活の一部になっている生徒も少なくない。そのような中で、あえて「手紙の方がよい」という論題を突きつけ、議論したい気持ちを煽ろうとしたものである。また、マイクロ・ディベートという形を採るために、資料などを準備せずに自分の気持ちや知識だけで議論できるものという出発点から出てきたものでもあつた。

③ 第3回のマイクロ・ディベート：「死刑制度は廃止すべきである。」（一部クラスでは全体ディベートとしても実施）

最終ディベートの論題には、教室ディベート用としてふさわしく、かつ議論のしやすさや資料の集めやすさなどの条件を満たすものが必要であった。結果として、前年度と同様に本論題を採用したのは、次のような理由による。

- ・この論題は中学生・高校生のディベートでよく取り上げられている。
- ・ディベートの入門書でも多くの本で扱われている。

では、なぜ本論題が教室ディベートのそれとして人気があるのかということを考えると、次のような点が挙げられる。

- ・生徒に命の大切さや当事者の気持ち等を考えさせるのによい。
- ・長年議論がなされていて論点が明確になっている。
- ・書物や雑誌を始めとしてインターネットでも多くの資料が手に入りやすい。

ところで、最終ディベート用に採用された「死刑制度は廃止すべきである。」という論題には、授業で扱うことに抵抗を感じる教師も少なくないと思われる。それは、「この問題は大きすぎて中学生には扱いきれない。」とか「ディベートというゲームに使う話題か？」という疑問が出そうだからである。実は、指導者自身にも当初は同様の不安があった。しかし、「では、何歳になれば適切なのか？」「中学生はこの問題を真剣に考えてはいけないのか？」と問い続けた結果、最終的には自信をもって本論題を採用することにした。それは、大切なのは年齢ではなく、実際に自分の目の前にいる生徒がこれをディベートの論題として扱うに耐えうる精神的レディネスをもっているかどうかだと考えたからであった。そして、自分の生徒はそれに耐えうる生徒であり、この論題にも真剣に取り組んでくれるであろうということを、それまでの授業をとおして感じ取っていたからであった。もちろん、扱いを間違えば生徒の心に傷を負わせたり、本校の教育に対する社会的信用を失ったりすることにもなりかねないので、論題を提示する際には生徒の心を醸成するように努めたつもりである。また、保護者からも同様の主旨で疑問の声があがる可能性を想定し、論題を導入する際に生徒にも指導者の考えを伝え、疑問をもった保護者には生徒をとおして理解を求めるように指導した。

さて、計画では以上の3つの論題を全てのクラスの授業で扱う予定であったが、中村が担当したあるクラスでは、第2回の授業で生徒自身にマイクロ・ディベートの論題を決めさせるという手法を採った。これは、教師から与えられる論題よりも生徒が自分で設定した論題の方が意欲的な活動を引き出すのではないかという考えからであった。はたして中村の目論見は当たった。どのクラスも意欲的に活動していたので、活動そのものに対する意欲については見かけ上の差はそれほど見られなかったが、授業後の感想には自分たちが設定した論題でディベートができたことを高く評価する声が目立った。ただし、グループによってディベートをするにはやりにくいのではないと思われる論題や、時流に左右されたような短絡的な論題が出てしまったことは予想どおりであった。

6. おわりに

本校では、「総合」の授業におけるディベートの指導は今年が2年目であった。昨年度に比較して、

2002年3月

指導内容・指導方法ともにレベルアップしたかという問いかけに対しては明確な答えはない。また、より根本的な問いとして、ディベートによって生徒のどのような力を育成することができたのかということに対しては、実証的な結論を得ていない。しかし、前者については、いくつかの新たな試みをしたことにより、指導内容・指導方法ともに“豊かになった”ということは確かであり、来年度以降の指導に対して新たな道を示すことができたと考えられる。また、後者については、研究部調査の結果に見られる傾向、自由記述式感想に表れる生徒の意識の高まり、本授業終了後の他の授業に生徒の行動に表れている影響などを総合すると、本校における「情報リテラシー学習」の目指す生徒像に迫るための一翼を担えたのではないと思われる。

なお、本コースを指導するにあたって、特に初期の段階で多大なる示唆と実践資料の提供をいただいた英語科蒔田守教諭には心から感謝の意を表したい。

◇参考資料

<ディベートに関する書籍等>

上条春夫「ディベートに強くなる本」学事出版、1995

「中高校生のためのやさしいディベート入門」学事出版、1999

松本道弘「やさしいディベート入門」中経出版、1990 ※松本氏は他にも著書あり

藤岡信勝「教室ディベート入門事例集」学事出版、1996

中嶋洋一「英語のディベート授業30の技」明治図書、1997

北岡俊明「ディベート能力の時代」産能大学出版部、1992

<死刑に関する書籍等>

アベール、ジャン（吉原達也他訳）『死刑制度の歴史』白水社、1997

アムネスティ・インターナショナル日本支部『知っていますか？死刑と人権 一問一答』解放出版社、1999

宮本倫好『死刑の大国アメリカ 政治と人権のはざま』叢書房、1998

死刑廃止編集委員会『犯罪被害者と死刑制度 年報・死刑廃止98』インパクト出版会、1998

宮崎哲弥・藤井誠二『少年の「罪と罰」論』春秋社、2000

モア、アン他（藤井留美訳）『犯罪に向かう脳』原書房、1997

菊田幸一『<改訂版>死刑廃止を考える』岩波ブックレット

『死刑と世論』成文堂、1993

死刑を考えるシンポジウム『死刑制度は必要か』東京弁護士会他、1986

レーダー、K・B『図説・死刑物語－期限と歴史と犠牲者－』原書房、1989

内閣総理大臣官房広報室「犯罪と処罰に関する世論調査」総理府、1989

団藤重光『死刑制度廃止論・第三版』有斐閣

資料7 第1クール(回)授業用ワークシート(肥沼版)

総合1学年「情報」コース⑤「ディベート」(1)
 投稿者: 肥沼 則明, 中村 真子

1. ディベートって何?

ディベートとは、一つの論題(テーマ)をめくって、論議を支持する肯定側と、現状を支持し論議を批判する否定側に分かれ、決められたルールに沿って議論し、その結果、どちらの議論が勝っていたか、その勝敗を決めるものです。

つまり、ディベートの特徴は
 ① (一つ)の(論題)について話し合う
 ② (肯定側)と(否定側)に分かれる
 ③ 一定の(ルール)に従って話し合う
 ④ (勝敗)を決定する

*ディベートは「知的格闘技」である!

2. ディベートで育てたい力
 ① (問題意識)を持ち、物事に対して深く考えるようになる
 ② (自分)の意見を持つようになる
 ③ (情報)を選択し、整理する能力が身に付く
 ④ (論議)的になるようになる
 ⑤ (相手)の立場に立って考えることができるようになる
 ⑥ (広く)ものを考え、見るようになる
 ⑦ 他者の(発言)を注意深く聞くようになる
 ⑧ (辞身)能力が向上する
 ⑨ (相手の発言)に早く対応する能力が身に付く
 ⑩ (論議)性を養うことができる

3. 今日の課題: マイクロ-ディベート
 ① ねらい 肯定・否定・審判の立場を体験する
 ② ディベートの流れ 肯定・否定の論議を審判が判定する

0) 準備 自分たちの主張をまとめる。
 1) 肯定側立論 2分 論議が正しいことを、具体例を持って主張する。
 2) 否定側立論 2分 論議が正しくないことを、具体例を持って主張する。
 3) 作戦タイム 2分 相手の論議に対抗する反論を組み立てる。
 4) 肯定側反駁 1分 1)の内容に反駁する。
 5) 否定側反駁 1分 2)の内容に反駁する。
 6) 判定審判・発表 2分 相手の論議について優劣を決め、勝敗を決める。
 合計 10分

反駁: 相手の意見に反対し、その非を論じ攻撃する。
 (他より交した非難攻撃に対して、逆に論じ返すこと)

③ グループ構成 2人・2人・2人の6人グループ
 ④ プログラム
 1) 原案ディベート 全体で話す 2) グループ分け
 3) 意見のまとめ 4) マイクロディベート実施 5) まとめ

4. フォーシートの書き方
 ① 意見は必ずメモする: キーワードの活用
 ② 意見には番号をつける
 ③ 対応している意見には「→」や「←」をつける
 ④ 既い意見には○をつける: 判定の目安にもなる

5. 審判の注意
 ① 原案をフォーシートにメモする
 ② わかりやすいように要点をメモする 例)「メモ→①」
 ③ 論議に対して筋が通った意見かを判断する
 ④ 相手の立論に対して、きちんと反駁しているかを自分のフォーシートを見て判断する
 ⑤ 相手にわかりやすく話しているかも視点の一つとする
 ⑥ 判定会議は、メンバーに聞かれないように、指示された順れた場所で行う
 ⑦ 先生の指示と一緒に、「〇〇の勝ちです」と宣言し、次いで理由を述べる

6. グループ内の役割分担
 多くの人に経験を積んでもらうため、役割を分担する。
 例) 立論と反駁は別の人が行う
 2分の立論の内、はじめの1分と次の1分を交代して行う

7. 一般的注意
 ① 教室内で、複数のグループが話し合うので、声の大きさに注意する。
 ② 単なる「言い争い」にならないようにする。

資料8 第1クール(回)授業用ワークシート(中村版)

総合「ディベート」資料
 9/4 2011.5.29
 2010.9.27

基礎的テクニク

ジャッジの基本的心得

ここでは、ディベートで立論や反駁をする際の基本的なテクニックについて説明します。

① 論議への意見を述べる。
 ジャッジは論議に対する個人的な考え方を判別して反駁すべきではありません。全員の中立の立場で判断しなければなりません。論議が自分の専門の範囲に該当する場合には特許に注意が必要となります。

② ディベーターへの個人的感情を述べる。
 ジャッジはディベーターに対して持っている個人的感情を判別して反駁すべきではありません。これは個人的な感情というだけでなく、「有名なディベーターだから嫌いだから」といふようなことも含まれません。最終的に公平な判断をする必要がある場合は、ディベーターが知り合いである場合は、全員のジャッジが関わっていただくことも必要です。

③ プレゼンテーション能力を判定の基準に持ち込まない。
 通常の教育ディベートではプレゼンテーション能力はジャッジの対象に含まれません。ディベーターの発言がいかにかつらに響きやすい、好印象を得やすい、それを判断して反駁すべきではありません。ただし、悪口であつたり小声であつたりして、聞き取れない場合は、その部分では発言されなかったものとして判断します。

④ 判定しようとする取合の内容だけを審議する。
 ジャッジは審議で行われている取合の内容だけを審議して判定を下さなければなりません。他の発言と関係ないか、自分ならこうするのだから、それならこうといった意見はしてはなりません。

⑤ ルール違反に厳しく対処する。
 ジャッジは公平な判断をするためにルール違反に対しては厳しく判断しなければなりません。判別権を越えたところから一つ一つ判別する場合は厳格ですが、反駁でのコミュニケーション、コメントのよりに、うっかりするミスがあつても大丈夫なようにルールについても注意を払っている必要があります。

フォーシートの審判
 ・1分以内の議論は真実を書く。
 ・2分以内の議論を書く。
 ・3分以内の議論を書く。
 ・4分以内の議論を書く。
 ・5分以内の議論を書く。

今日のポイント
 ・「ディベート」話し合いのやりかた?
 ・「ディベート」の正しいやりかたがわかった?
 ・「ディベート」は何のためにやるの?
 ... 1分は 頑張ろう!

本文を引用する
 読解資料として、本文を引用する場合は以下の点に注意します。
 ・ 発言者の名前: その道の専門家である人の発言が望ましい
 ・ 発言の形態: 発言者のようなものが望ましい
 ・ 発言の主旨: 発言で述べられていることが望ましい
 ・ 発言の内容: 結論だけでなくその背景も述べられているのが望ましい
 例)「読解資料を引用します。XXXは、(18X)に、その発言がXXXで以下のように述べています。引用をします。(引用)引用を終わります。」

今日のポイントの出現:
<http://www.tuhsiglobe.net/~course/debate/> (赤丸)
<http://www.tuhsiglobe.net/~course/debate/> (赤丸)

資料9 第2クール(回)授業用まとめの記録(生徒配布用)

1年「総合」情報リテラシー学習「ディベート」(2) 鹿沼・中村 薫

II 本日の学習

○自分の意見を論理的に相手に伝える方法を学ぶ。(何をどのように言ったらいいか?)
 ○的確な判定方法を学ぶ。(もっと果敢と判断に自信を持てるか?)
 ○最終ディベートに向けての準備をする。(何を考え、何を準備してきたらいいか?)

1 自分の意見を論理的に相手に伝える方法

(1) 論理的意見を構築する

→ 論議「授業中に給食制度を導入すべきである。」の肯定側立論を例にして→

① 論議の浅い出し

- ・公立の中学校には給食があるのに、なぜ附属中にはないのか?
- ・給食があれば、栄養バランスの取れた食事ができて健康にいい。
- ・給食があれば、宿題やお弁当を作る労力をなくすることができる。
- ・給食は大量に作ることで、お弁当よりもむしろ費用が安くなる。
- ・給食があれば、お弁当を忘れてきたり残物が置かれたりということがなくなる。

② 立論に向けて①(思考の整理)

△給食制度の導入のような論議は、何か新しいことを行うべきかどうかを議論するものであり、このような論議は「政策論議」と呼ばれる。政策論議の場合は、次のような思考過程で意見を整理していくとよい。

- 1) 習学・・・基本的な考え方を固める
 - ・給食とお弁当を比べると給食の方が利点が多い。
- 2) 定義・・・論議に使われている重要なことばが何をさしているかを説明する
 - ・給食とは、学校または給食センターなどの専門職員が作る、全生徒が共通に食べる食事であり、その運営が校長及び個人の負担によって行われるものをさす。また、お弁当とは、本人または家庭が作った食事を所持したものをさす。
- 3) 問題分析・・・具体的な問題点を挙げて上げる
 - ・同じ義務教育の学校なのに、国立である附属中には給食がないのは不公平である。
 - ・お弁当は、栄養バランスの点で給食にかなわない。
 - ・母親が毎日早起きをしてお弁当を作るのは大変である。
 - ・お弁当は、食材や調理にお金がかかる。
 - ・お弁当を持参するためには大きなバックが必要で、かつ重いかばんを持ち運ばなければならない。
- 4) プラン・・・変化を起こす場合は、その具体的な方法を提示する
 - ・月曜日～金曜日は、昼食の時間に給食を出すようにする。
- 5) メリット(短所)・・・変化の結果で生まれると考えられる利点を述べる
 - ・問題分析に挙げた欠点が解決される。

③ 立論に向けて(意見の説明)

【課題】 問題分析に挙げられている意見を、より細かい理由をつけて説明してみよう!

※でも何か足りないような・・・、それはいったい何だろうか?

(2) 論理的意見を支えるもの

① 日常会話で意見を述べる際の典型的な形

A 買って、買って、ファミコン買って!
 B だって、○○ちゃんも持ってるし、△△ちゃんも持ってるよ。

A テレビは子供の発育に害を及ぼす。
 B 子供はテレビで悪い言葉を見たり、真似をしたりしてしまうからである。

A: 主張 B: 理由

A テレビは子供の発育に害を及ぼす。
 C 先日、例の「赤信号、みんなで渡れば怖くない」と言いながら赤信号を渡る小学生の一面を見た。
 B 子供はテレビで悪い言葉を見たり、真似をしたりしてしまうからである。

② ディベートの立論に必要な3要素

- 1) 証拠・データ (C)
 - 議論の出発点。納得しようとする相手が十分に納得できるもの。
 - ・事例 (場/時/人)
 - ・統計 (数字/出典)
 - ・専門家や関係者の意見 (人名/団体名/会誌文)
- 2) 理由づけ (B)
 - データと主張を結ぶもの。データから主張がなぜ導き出されるのかを説明するもの。
- 3) 主張 (A)
 - 議論の結論。データから理由づけを経て導き出されるもの。

A テレビは子供の発育に害を及ぼす。
 C 先日、例の「赤信号、みんなで渡れば怖くない」と言いながら赤信号を渡る小学生の一面を見た。
 この点についてさらに証拠資料を引用する。「小学生の交通安全に対する意識調査」の結果によると、「赤信号でも危険点を通ることがある」という設問に「はい」と答えた児童の割合が、この漢字解のことばが流行った年に前年度までの平均よりも13%上昇した。なお、他の設問については割合等なちはなかったことから、このことばが児童の行動に影響を及ぼしたことは明らかである。
 B 子供はテレビで悪い言葉を見たり、真似をしたりしてしまうからである。

(3) 意見の言い方①(立論時)

① 発表までの作業

- 1) 立論シートを作成する。
- 2) 下書きをする。
- 3) 検校を加える(書き直す)。
- 4) 消音をする。
- 5) スピーチ練習をする。

② 立論シートの書き方(そのまま発表原稿になる)

習学(基本的な立論)は、「○○」です。
 定義は、「○○」です。
 問題分析は、○つあります。
 ・第一に、「○○」です。
 ・第二に、「○○」です。
 ・第三に、「○○」です。
 プランは、「○○」です。
 ・メリットは、「○○」です。

※今回の活動では、「習学」「問題分析」「メリット」の3点だけでよい。

(4) 意見の言い方②(反駁時)

① 反駁の目的

- ・相手の議論の弱りを証明する。
- ・自分の議論の正当性を審判に訴える。

② 意見の作り方

- 1) 相手の議論にふれる。
「～例は・・・で○○といたしましたが、」
- 2) 要点を送る。
「それは誤り(まちがいが、証拠不十分)です。」
- 3) 理由を説明する。
「なぜなら～だからです。」
「たとえば～です。」
- 4) 重要性にふれる。
「つまり、～ということです。」

(5) 反駁事項

① 相手チームへの非礼行為

- ていねいな言葉遣いを心がける。
- やじ、揚げ足取り、中傷、私事に関する発言は禁止。

② 証拠のねつ造

- 出典を十分に確認して発言を行い、リサーチのない事実については発言しない。

③ 反駁での新しい議論

- 立論であってはいない新たなプランやメリットを送ってほならない。

④ タイムオーバー

- 時間が来たら、途中で話すのをやめる。

2 的確な判定方法

(1) 判定方法の種類

- ① パラットタイプ・・・評価項目ごとに得点をつけ、合計得点で勝敗を決める。
→ 数値化するのだからわかりやすいが、全体の印象と異なる場合がある
- ② 総合評価タイプ・・・肯定・否定双方の議論の強弱、かみ合いから判定を下す。
→ 全体的な印象で決められるが、判定理由の説明が難しい
- ③ 折衷型・・・上記の2つを組み合わせるもの
→ 両者の利点があるが、最終的な結論が出しにくい。

(2) 今回の活動での判定方法 → パラットタイプを基本に

| 展開 | 観 点 |
|----|--|
| 立論 | ・「主張」が明確である。 ・「理由」が明確である。 ・話す速さや声の大きさが適切である。 ・情報や資料をよく活用している。 |
| 反駁 | ・相手の「主張」をよく知っている。 ・論点がずれていない。 ・話す速さや声の大きさが適切である。 ・情報や資料をよく活用している。 |
| | ・グループ内でよく協力し合っているか。 ・反駁行動はないか。 |

(3) 審判の心得

- ① 議論に関する自分の知識を捨てる
→ 自分がもっている知識やディベーターの知識を比較して、それを根拠に判断を下してはいけない。
- ② 議論の事実を指図して判断を下す
→ 感情や印象に流されないよう、ディベーターの持ち出した意見やデータを具体的に取り上げて、判定理由を述べる。
- ③ 議論の範囲内に限って判定を下す
→ 意見が交えずに、あくまでも実際に議論されたことに限って判断する。

資料9のつづき

3 最終ディベートに向けて

(1) 期日 次回(第3クール)の授業時

(2) 議題 「死刑制度は廃止すべきである。」

(3) 方法

① 肯定側4人、否定側4人、審判2(3)人の10(11)人グループで行う。
※司会及びタイムキーパーは審判が行う。

② 内容及び所要時間は次の通りとする。

| | |
|-----------|------|
| 肯定側立論(3分) | 計15分 |
| 否定側立論(3分) | |
| 作戦タイム(2分) | |
| 否定側反駁(2分) | |
| 肯定側反駁(2分) | |

③ 判定発表(1分)

④ 肯定側・否定側・審判の組み合わせを入れ替えて2度行う。

(4) グループ決め

◇グループA・・・男子1番～5番、女子1番～5番 計10人
◇グループB・・・男子6番～10番、女子6番～10番 計10人
◇グループC・・・男子11番～15番、女子11番～15番 計10人
◇グループD・・・男子16番～20(21)番、女子16番～20(21)番 計11人
※女子の番号は、女子の最初の生徒を1番としている。

(5) 役割決め

① グループ内で話し合って役割を決める。希望を優先するが、重なった場合は抽選で。
② 審判、否定側、肯定側の順で決める。

(6) 準備

① 肯定側・否定側共に立論の準備をしておく。
→立論のための構構(メモ)、資料を持ち寄ること。
② 肯定側・否定側共に反駁のための準備をしておく。
→反駁のための資料を持ち寄ること。
③ 審判は、両者の議論を理解できるように、両方の立場の資料を目を通しておく。

(7) 備考

① 自分だけの個人的な意見だけでは論が立たない論題である。必ず複数の資料を得て、事実に論理的な意見を構築しておくこと。判定の際には、準備の際にも大きな材料となる。
② 参考資料は、書籍、雑誌、新聞、インターネットなど無数にあるので、書籍、図書館、パソコンなどを利用して集めるようにするとよい。ただし、インターネットのホームページで集めた資料のうち、個人的な意見のもの(証言やデータのないもの)は、意見を構築する際の視点としては参考になるが、証拠資料にはならないので注意すること。
③ 英語科準備室前の机にも死刑存続賛否の書籍を何冊か購入して置いてあるので、利用するとよい(ただし、貸し出し禁止)。※(8)参考資料を参照のこと。

(8) 死刑制度に関する争点

① 人命の価値
→ 犯人の人命、被害者の人命、人命そのもの、などについて議論する。
② 裁判の可能性
→ 無実の犯人を死刑にしてしまう可能性などについて議論する。
③ 世論の火傷
→ 死刑制度に対する国民の世論や国際的な流れについて議論する。
④ 人権の侵害
→ 犯人の人間、被害者の人権、人権そのもの、などについて議論する。
⑤ 死刑の残虐性
→ 死刑という刑そのものの残虐性について議論する。
⑥ 死刑方法の残虐性
→ 死刑方法(絞首刑、銃殺刑、電気椅子、毒殺刑等)の残虐性について議論する。
⑦ 刑執行の余地
→ 犯人に対する情状酌量の余地を議論する。
⑧ 犯罪者の更正
→ 犯人を死刑以外の刑の方法で社会復帰させる方法を議論する。
⑨ 犯罪防止力
→ 死刑が犯罪の抑止力になるかどうかについて議論する。
⑩ 被害者の権利
→ 被害者の権利について議論する。
⑪ 国家の威厳
→ 死刑執行は国家の威厳行為になるかどうかについて議論する。
⑫ 権力の乱用
→ 死刑執行は権力の乱用になるかどうかということについて議論する。

(9) 参考資料

① 購入済み図書
・ ジェン・フェル (著) 藤原道徳訳 『死刑制度の歴史』 白水社、1997
・ アナスタシア・イヴァンチンコフ 日本実業 『知っていますか? 死刑と人権 一問一答』 解放出版社、1999
・ 日本実業 『死刑の大国アメリカ 政治と人権のはざま』 産経新聞、1998
・ 死刑廃止国際委員会 『犯罪被害者と死刑制度 年報・死刑廃止98』 インパクト出版会、1998
・ 宮崎晋彦・藤井健二 『少年の「死と罰」論』 春秋社、2000
・ フン・モア他 (編) 谷本浩一訳 『犯罪に向かう罰』 展覧房、1997

② 雑誌図書(購入済図書以外)
・ 死刑論 『今日の日経』 死刑廃止を考える 岩波ブックレット
・ 福田繁一 『死刑と世論』 成文堂、1991
・ 死刑を考えるシンポジウム 『死刑制度は必要か』 東京弁護士会、1985
・ K・B・レーダー 『囚徒・死刑制度—期間と歴史と犠牲者—』 展覧房、1989
・ 内閣府法制局 『犯罪と死刑に関する世論調査』 総務府、1989
・ 田嶋重光 『死刑制度廃止論』 第三堂、有斐閣

③ ディベートに関する入門書
・ 上巻 著者『ディベートに強くなる本』 学研出版、1995
・ 松本浩弘 『やさしいディベート入門』 中経出版、1990 ※松本氏は他にも著書あり
・ 藤岡信綱 『教室ディベート入門事例集』 学事出版

資料10 第3クール(回)授業用ワークシート(中村版)

H19.11.14
代表者 中村 先生

ディベート作戦シート

議題 死刑制度は廃止すべきである
 定義 日本国内に限定する
 立論 ()、()、() を明確に
 「メリット(デメリット)は〇つあります。
 第1の は、・・・です。・・・
 第2の は、・・・です。・・・」
 証拠資料を引用します。出典は、△の○、○の○年度です。
 引用順序、～、引用終了。

反駁 「〇側の△番目のメリット(デメリット)で、～といいますが、それはまちがいです(証拠不十分)です。なぜなら、・・・
 つまり、～ということです」

ルール違反 相手の() 行為(野次、中傷、個人的感情など)
 () のねつ造
 反駁のとき、() で書かなかったことを言う
 () をオーバーする

ジャッジの基本的な心構
 () と同じかどうかで、点数をつけてはいけません。
 ディベーターへの() や、悪い込みを掛ける。
 おもしろい発言のしかたや、声の大きさなどに左右されない。
 () 違反は、おびしく公平に指める。

【立論メモ】 わたしは 肯定側 ・ 否定側
 第1のメリット・デメリット(出典は)
 第2のメリット・デメリット(出典は)
 第3のメリット・デメリット(出典は)

代表者 中村 先生

ディベート審判 判定シート

| 判定側 | 肯定側 | 否定側 | 審判側 | 審判メモ |
|-----|------------------------------------|---|-----|-------------------|
| 1 | 立論メリット1 死刑廃止のメリットが大きい。 | メリット1への反駁 本グループは反駁のし 関係ない。 | 2 | |
| 2 | 立論メリット2 犯罪者の人権を尊重する。 死刑は必要か? | メリット2への反駁 人を殺した人への人権など ない。 | 3 | |
| 3 | 立論メリット3 日本の。 世界の死刑は必要か? | メリット3への反駁 死刑は必要か? 死刑は必要か? 死刑は必要か? | 2 | |
| 3 | 立論メリット4 死刑は必要か? | メリット4への反駁 | | |
| 3 | デメリット1への反駁 死刑は必要か? | 立論デメリット1 死刑は必要か? | 1 | |
| 3 | デメリット2への反駁 死刑は必要か? | 立論デメリット2 死刑は必要か? | 3 | |
| 3 | デメリット3への反駁 死刑は必要か? | 立論デメリット3 死刑は必要か? | 1 | |
| 1 | デメリット4への反駁 死刑は必要か? | 立論デメリット4 死刑は必要か? | 1 | 立論デメリット4 は必要か? |
| 19 | 肯定側合計得点 | 否定側合計得点 | 13 | |
| ① | 全体の印象の良いほうに○(協力していたかなど) | | | |

以上の結果、(肯定)側の勝利とします

3組 29番 中村 先生

資料11 最終ディベート用フローシートの記入例（肥沼版）

① 一般用

ディベート・フローシート

13年11月22日（木）実施

論題：死刑制度は廃止するべきである

メンバー：肯定側 鈴木、佐々木、後藤、リョウ 否定側 喜々、小橋川、関、近藤 審判 久保、佐々倉

| ① 肯定側立論 | ③ 否定側反駁 | ② 否定側立論 | ④ 肯定側反駁 |
|---|---|---|---|
| <p>① 死刑の無意味と=犯罪→反省させるための人殺りではない</p> <p>② 死刑とそれがないものとのちがいのあいまいさ。</p> <p>③ 犯罪のときはどうしようもなくなるので、無期ちようえきにすればまだ直せるので死刑は反対。</p> <p>⑤ 被害者の意見といっても実際にやるのは関係者なのでその人がさい悪かんをもちてしまう。</p> | <p>① 無期ちようえきの人はいない。や、でも20年ぐらいで出されてしまう。めでたい時なとと出されてしまっているので、②費用がかか、てしまう。</p> | <p>① 死刑廃止アンケート。国民の半分以上が反対</p> <p>② 社会復帰より死刑の方が意味がある。</p> <p>③ 被害者側の意見尊重</p> <p>④ 死刑がなくなると犯罪者がふえてしまう。</p> <p>⑤ 死刑がなくなると囚人が増えて費用にこまる。</p> | <p>① 犯罪者が増えたという例はない。</p> <p>② 被害者側の意見といっても殺すのはちがう人なのでその人にさい悪感かんが生まれてしまう。</p> <p>③ 犯罪は費用のほとんどではないので費用は関係ないと思う。</p> |

理由および審判からのコメント

否定側の被害者側の意見の尊重というところが、自分がな、たとしてもそう思ったのでひかれた。あと費用の問題のとき肯定側はデ、タはな、たので……

判定 肯定側 の勝ち

記入者 (1)組 (7)番 後藤 祥

② 審判用

ディベート・フローシート（審判専用）

2001年11月22日（木）実施

論題：死刑制度は廃止するべきである

メンバー：肯定側 山本、松山、山内、渡辺 否定側 喜々、小橋川、関、近藤 審判 坂東、田村

| ① 肯定側立論 | ③ 否定側反駁 | ② 否定側立論 | ④ 肯定側反駁 |
|--|---|---|--|
| <p>① 死刑→米・日本だけ</p> <p>② 他国→死刑廃止</p> <p>③ 日本もそうするべき。</p> <p>④ 死刑をなしなけければいけな、い、ということはない。</p> <p>⑤ 1つの命がうは、あれたから、といって、変おりに、他の命を、差し出す、というのを、変。</p> | <p>① 他国がや、て、いるから……」</p> <p>② →メリットが、見られない。</p> <p>③ 死刑という言、葉で「反罪を思、いよ、ち、よ、り、せ、る、」</p> | <p>① 死刑廃止すべき→47%</p> <p>② 死刑がなくなったから犯罪をしても良い、という考えが、生まれる。</p> <p>③ 死刑がなくなる→無期ちようえき</p> <p>④ 正々→でも、10年ゴ、には、戻、て、くる。→また事件が起きるかも。→責任を責任が、と、れ、な、い、。</p> <p>⑤ 刑務所→囚の予算が、な、い、。</p> | <p>① 「思、い、よ、ち、よ、り、せ、る、」</p> <p>② →犯罪者に面、接、</p> <p>③ →それは、な、い、と、いう意見。</p> <p>④ →47%、</p> <p>⑤ 他、の、53%、は、違、う、意見。</p> |

| 肯定側得点表 | | | | | 否定側得点表 | | | | |
|--------|-----|-----|-----|-------|--------|-----|-----|-----|-------|
| 主張 | 2/2 | 効果 | 2/2 | 合計 11 | 主張 | 2/2 | 効果 | 2/2 | 合計 17 |
| 理由 | 0/2 | 一貫性 | 1/2 | | 理由 | 2/2 | 一貫性 | 2/2 | |
| 資料 | 0/2 | 資料 | 2/2 | | 資料 | 0/2 | 資料 | 0/2 | |
| 話し方 | 2/2 | 話し方 | 0/2 | | 話し方 | 1/2 | 話し方 | 1/2 | |
| 反駁 | 4/8 | 協力 | 5/8 | | 反駁 | 7/8 | 協力 | 2/2 | |

判定 否定側 の勝ち

コメント 否定側の立論は、「47%」というくわしいデ、タを、使、っ、て、いた、が、肯定側の立論は、「他国がや、て、いるから日本も」という、あまりハッキリしない立論だ、た。また、反論では、肯定側は資料を、使、っ、て、いた、の、だ、が、否定側の意見を

資料12 最終ディベート用に生徒が準備した立論シート (否定側)

総合ディベート

「死刑制度は廃止すべきである」

についての否定側立論

これから「死刑制度は廃止すべきである」の論題についての否定側立論を始めます。

まず、最初につらこを述べます。

まず、一般の国民の死刑に対する意見を述べます。

第一に、

国民の7割以上が死刑制度を、指示しています。

証拠資料を引用します。

出展は ホームページ：国際人権（自由権）規約に基づき提出された
第四回日本政府報告書に対する日弁連報告書より

引用開始

(1) 国内での統計資料

前略、世論調査の質問の選択肢は、

「どんな場合でも死刑制度は廃止すべきである」・・・(13.6%)

「場合によっては死刑もやむをえない」・・・(73.8%)

引用終了

よって、「死刑制度は廃止すべきである」と述べている国民は、わずか一割であり、

「死刑制度」を指示している国民は、七割に上ることがわかります。

このような状況の中で死刑制度を廃止することは難しいと考えられます。

(第一番終了)

第二に、

次に、「もし、死刑制度を廃止したらどうなるか」ということについて意見を述べます。

現行刑法では死刑の一つ下の刑は「無期懲役」であります。

証拠資料を引用します。

第一の、出展は ホームページ：刑法より ^{無期懲役とは、懲役期間がたてまつ} ^{いけい刑のことをいいますか、10年程で}

引用開始

第一編、総則の第五章 仮出獄について、「仮出獄」第28条 懲役又は、禁錮に処された者に改換の状があるときは、有期刑については刑期の3分の1を、無期刑については10年を経過した後、行政官庁の処分によって仮に出獄を許す事ができる。

引用終了

→ P.28

すなわち、凶悪犯罪者で有りながら、わずか10年で社会復帰可能というのは、刑として、軽すぎである又、社会や被害者の応報感情にそぐわず、再犯のおそれもあります。実例も有ります。

そのことから、「死刑」という刑罰をのぞいてしまうのは大変恐ろしいことであるのと

同時に、犯罪人に有利な環境ができてしまいます。

(第二番終了)